Taste Sweet

歌白　葉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｔａｓｔｅ　Ｓｗｅｅｔ

【Ｎコード】
Ｎ２７３９Ｄ

【作者名】
歌白　葉

【あらすじ】
高校の保健室の先生に惚れられてしまった僕の話。こんな恋愛もありなのか？

第1話　いつもの時間

今週もやってきてしまった、この時間。

いや何も嫌いな授業だとかじゃない。僕にとっては少しだけ迷惑というか、なんというか・・・・・・

４時間目の体育が終わり、体育館から男子達がぞろぞろと出てくる。その中に僕も居た。今日は少し気温が高いせいか、結構汗をかいて体操着が湿っている。
昼食を早く食べたいのか、みんな自然と早足になる。だが僕は一人集団の後ろに隠れていた。このままやり過ごせるかも・・・なんて淡い期待を抱きながら。

校舎に入り、職員室と保健室のある長い廊下を歩く。ここは一番注意しなければならない所だ。辺りに気を配り、なるべく人に紛れて歩く。遠回りしていけばいいのだが、どうせまた教室で待ち伏せされるだけだろう。

保健室のすぐ手前まで来た。ドアは・・・よし！開いてない！場合によっては開いている時もあるが今日は違うみたいだ。

周りに姿も見えないし、今日はこのまま突破だ！そう思って安心して保健室を横切ろうとしたその瞬間、

ガラッ

・・・ま、まさか・・・・・・・・・・・・

「あっ、アキくん見っけ。捕獲っ！」

そう言って僕の腕をがっしり掴んで引きずる、保健室のおば・・・お姉さん。

・・・・・・隊長、任務は失敗に終わりそうです・・・・・・・・・・・・

クラスメイトの哀れむような、羨むような視線にさらされながら、僕は保健室に引きずり込まれた。そしてあっという間に先生の机の向かいに座らされた。毎度毎度見事な手際だ。尊敬に値するよ、全く。

「♪君をずっと幸せに～」

先生は歌をくちずさみながら自分のバッグから弁当箱を取り出した。

「♪させてあげるよ～」

・・・・・・歌詞が違う気がする。それに何故僕を見ながら言う？

「アキくんも一緒に食べよーよ」

この後の展開はわかるのだが、一応言ってみる。

「僕の昼メシは教室の鞄の中で待機中ですが・・・」

待ってましたとばかりに先生がニンマリと笑う。そしてジャーン！とどこからか僕の弁当箱とペットボトルを取り出す。ふぅ、この展

開にも慣れてきたよ。

「あたしって用意いいでしょ～」

なんともうれしそうだ。

「あのですね、勝手に人の鞄の中物色しないで下さい」

って言っても無駄だろうが・・・・・・

「もぉ、いっつもそればっかり。あたしのお陰でこうして授業終わってすぐお弁当が食べれるんだよ。ここはありがとうって感謝するところだよ？」

わからないでもない。でも勝手に鞄の中身持ってきたからプラスマイナスゼロって感じだ。

「ペットボトルください」

体育の後なのでさすがに喉が乾いた。

「はいどうぞ」

どーも。キャップをあけ、口をつける。やっぱり冷やしてきて正解だった。冷たい麦茶がおいしい。

僕がゴクゴク麦茶を飲んでいると先生がとんでもないことをつぶやいた。

「あ、さっき一口もらったから」

ぶっっ！！？？？

僕は大屋晶（おおやあき）。女みたいな名前だが気にしないでくれ。男女関係なくみんな「アキちゃん」「アキ」「アキくん」などと呼ばれている。これはたぶん、僕が少し童顔なせいだろう。みんなからすれば話し掛けやすいそうだ。確かにムスッとした愛想のない顔よりはいいと思う。クラスのみんなと仲良くできるし。

そしてこの先生らしくない先生は桜坂恵里子（さくらざかえりこ）先生。少なくともこの人に会うまでは僕の人生は順調だったと思う。先生は２６歳独身。生徒からの人気はすごい。なぜなら先生は美人でいつも元気で明るく、おまけに背が高くスタイルもいい。それに高校生みたいなノリで生徒と接していて馴染みやすい。生徒の信頼も厚く、よく相談を受けてるらしい。男性教師の中にも好意を寄せている人がいるとか。

そんな先生と僕が何故一緒に昼食を食べているのか？原因は先生のほうにある。なんでも僕が入学して初めて保健室に来たとき僕に一目惚れしたとか。（完全な一方通行だがここでは触れないでおく）

それからというもの、廊下ですれ違うと手を振ったり、抱きついてきたり、今日みたいに昼食を一緒に食べよう（かなり強引）など、職務そっちのけでかなりの猛アタックを続けている。

うん、教師としてあるまじき行為だと思うよ。

当然周りが黙っていないわけで・・・・・先生は全校生徒から慕われているので、僕が先生と仲良くするとそのみんな＋αがものすごい目で睨んでくるんだ、これが。

でもようやく最近は僕が先生に対して特別な感情を抱いているわけじゃないというのがわかってきたらしく、だいぶましになっている。まあ今でも冷やかされるけど。

でもこの事は校長や教頭も知っていて、先生も厳重注意を受けたはずなのだが本人は、「たくさんの生徒とのコミュニケーションをとることで悩みを抱え込まず相談してくれる生徒が増えてるんです。いいことでしょう？って言ってやったわ！」と自慢げに語っていた。

学校からしても桜坂先生を失うことはかなり痛いそうなので、問題にはなっていないようだ。

いや、十分問題だけどさ。

でもこれって安心していいのか？漠然と不安なんだが・・・・・・

勢いよく麦茶を吹き出した僕を見て先生は笑いながら言った。

「冗談よ！冗談！」

・・・・・・僕の高校生活には「平穏」という文字はなさそうだ。

ふたりだけの保健室で僕はひとり確信した。

第2話　呼び出し

「ね、先生ってなんか他人行儀だから呼び方変えない？」

僕はようやく弁当箱を開けて食べ始めたところだったが、ここでまた時と場所を考えず発言する保健室のお姉さん。

「あの～ここは学校ですよ？生徒が先生って呼ぶのは普通なんじゃ・・・」

「それじゃダメ！だって私達は愛し合ってるんだよ！？名前を呼び合うのが普通でしょ？」

確かに先生は僕のこと好きみたいだが、愛し合った覚えはない。全くね。

「僕のことはアキって呼んでるじゃないですか」

「だってアキくんはあたしのこと名前で呼んでくれないじゃない！」

いやいや、それは無理がありやすぜお姉さん。

「年上を呼び捨てってのはちょっと・・・」

「あたしは全然構わないから！ほら、呼んで、恵里子って。え・り・こ」

そう言って僕の顔をのぞき込む先生。うう・・・そんな顔で見つめ

ないでくれ。

「え、恵里子・・・先生・・・・・・」

これで勘弁してくれ。

「もうっ！それじゃ他の女生徒と一緒じゃない」

すいません・・・ってなんで僕謝ってんの？

「いいもん、これからずっと恵里子って呼んでもらうから」

それはちょっと問題発言じゃないか？

顔を上げると先生はまだ少し怒った顔をしていたが、僕と目が合うと表情を緩めた。

「早くお弁当食べないと授業始まっちゃうよ？」

その言葉で僕は我に返り時計を見た。５時間目が始まる１０分前だ。うわ、これはまずい。

僕は残りの弁当を一気にかきこみ、先生に何も言わず猛スピードで教室へ戻った。友達に声を掛けられながら自分の席に向かう。座ってから気づいた。机の端に何かメモが貼ってある・・・・・・セロハンテープを取って裏返すと、こんなことが書いてあった。

放課後もきてね　　恵里子

完璧な根回しだな。今日は早く帰ろうと思ってたのに・・・・・・

「お前らラブラブだな」

「うわっ！」

驚き、後ろを振り返ると健が身を乗り出していた。きっとこのメモをのぞき見したに違いない。

「ゴメンゴメン、驚かす気はなかったんだけど」

「・・・見たか？」

「お前が来る前にな」

余計悪いわっ！

「しかしあの恵里子先生とつき合うなんてお前すごいな」

椅子に座って健が言う。

「別につき合ってないし」

「え、そうなの？」

何度もそう言ってる！

「何回言わせれば気が済むんだよ。別に先生の・・・」

「アキは先生のこと好きじゃないの？」

なんだ？いきなり？

「別にそんな感情ないし・・・」

「じゃあ、好きか嫌いかっていったらどっちだ？」

そりゃ、まあ嫌いではない。

「好き、だけど。でも」

「ならいいじゃん」

そう言って健は机から教科書やノートを出し始めた。前を見ると数学の先生が教室に入ってきたので、僕も話すのをやめて教科書を取り出した。

その後の授業はあっという間に過ぎ、すぐに放課後になってしまった。僕はすぐにでも家に帰り、ゲームでもやっていたい気分だったが一応保健室に行ってみることにした。

階段を降りて角を曲がり、突き当たりの所に保健室はある。僕は扉を静かに動かした。

「失礼します・・・」

「あ、アキくん。ちょっと待ってね、これ、終わらせちゃうから」

先生は自分の机に向かってノートに何か書いていた。僕はいつもの椅子に座って待つことにした。

「何書いてるんですか？」

「これはね、私の日記。初めて教師の仕事をした日から毎日書いてるの」

「へえ、いいですね。そういうの」

僕が感心していると先生は書きながらつぶやいた。

「アキくんとの、ランチタイム・・・楽しかった。今日は、放課後も、来てくれて・・・うれしい・・・」

・・・それって僕のことばっかりなんじゃ・・・・・・

日記を書き終えたらしく先生はノートをバッグにしまった。そして頬杖をついて僕を見つめる。

「えっと、なんか僕に用があるんですか？」

「ううん、特にないよ」

？　用もなしに僕を呼んだのか？

「アキくんと話がしたいなって思って。強いて言えばそれが用件だよ」

そう言ってニコッと笑う恵里子先生。

こういうのは苦手なんだけど、たまにはいいか。

恵里子先生と過ごす毎日の中で、久しぶりに落ち着く時間だった。

第3話　好きの意味

僕はしばらく窓際に立って、なんとなく外を眺めていた。

「ねえアキくん」

「ん、なに？先生」

振り返ると恵里子先生は、ベッドの隣に立っておいでおいでと手招きをしている。

何かと思い、僕は先生の方へ近づいていった。すると先生はベッドをカーテンで覆って外から見えなくした。そして突然僕の腕を掴んだかと思うと、勢いよくグイッと引っ張った。

「わわっ！！」

僕は完全にバランスを崩し、ベッドに頭から突っ込んだ。

「あ・・・ゴメン大丈夫？」

すぐ後ろから先生の声が聞こえた。幸い枕があったので衝撃は少し和らいだ。

「はい、大丈夫です」

くぐもった声で答える。

一体なんなんだと思いながら体の向きを変えると、なんと先生が僕の上に覆い被さっていた！

「せっ、先生？」

驚きで声が裏返る。

先生は何も言わず微笑んだまま体を僕に密着させてきた。僕の頭の中でいろんな想像（妄想）が駆け巡る。

放課後で、カーテン閉めて、ベッドでふたりっきりっていったら・・・まさかアレ！？

途端に顔が熱くなる。

「顔赤いよ？もぉ、何想像してたの？」

そういう先生の顔も若干赤い。何って・・・そりゃ、まあ・・・ね・・・

「アキくん」

視線を合わせられずにいると、先生が僕の頬を両手で包み込み、顔を近づけてきた。

「！！　ちょっ・・・え、恵里子先生・・・」

僕はどうしていいかわからずただ困惑していた。顔がかなり近い。

もしかしてこれは・・・・・・キス！？

人生初のキスが年上の恵里子先生に奪われる・・・！

・・・・・・ということにはならなかった。先生はあと数センチというところで顔を止めた。恵里子先生の顔をこんなに間近で見たのは初めてだった。先生のパッチリした目。首筋をくすぐる茶色い髪、ほんのり赤く染まる頬。お互いの息が触れて熱が伝わるこの距離が、

不思議と緊張を感じさせなかった。

「・・・アキくん」

いつになく真剣な目でつぶやく先生。

「は、はい」

先生は僕をじっと見つめて言った。

「私のこと、嫌い？」

・・・・・・・え？

「せ、先生？何を・・・・・・・」

困惑する僕に先生は続けた。

「私のこと迷惑って思ってない？」

「別にそんな風には・・・」

「本当？」

そう言って潤んだ目で僕を見つめる。両手で顔を包み込まれているので僕は顔の向きを変えれず、落ち着きなく目を動かした。

「いや、迷惑なんかじゃないけど・・・やっぱり弁当持ってきたときは驚いたかな・・・」

先生は笑って、更に体を密着させてきた。僕の頬と先生の頬が触れあう。先生は僕の首と体に手をまわしていた。だが僕はどうしてい

いかわからず、何もせずに体を固くしていた。
僕の耳元で先生が囁いた。
「私のこと、嫌い？」
僕はかすかに首を振った。
「嫌いじゃないです・・・」
「じゃあ好き？」
僕は少し躊躇ったが答えた。
「はい、好きです・・・」
「そう、よかった」
「あ、でもそういう意味じゃ・・・」
僕の言葉に先生は体を起こした。そして少し怒った口調で話す。
「じゃあどういう意味なの？先生として好きって言ったら、怒るよ」
僕は困った。じゃあ、なんて言ったらいいんだ？
「アキくん。私ね、好きの意味はひとつだと思うの」
何も言えずにいた僕に、先生はやさしく話し掛ける。

「少しでも好きって気持ちがあるなら、それでいいんじゃないかなって思うよ」

健と同じだ・・・・・・

「・・・１０歳も差があっても？」

「うん・・・年齢差なんてどうにでもなるよ」

僕の問いに先生はすぐ答えた。何故だかその顔は悲しそうだった。

「そうかな」

「そうだよ」

不思議と言いくるめられている感じはしなかった。僕は立ち上がり、先生の隣に立って一緒に窓の外の風景を眺めた。

外を歩いている生徒で先生に手を振ってくる人もいた。僕は恥ずかしく、窓に背を向けた。でも僕の左手はしっかりと先生の手を握っていた。

こんな恋愛も・・・・・・ありなのかな。

当分その答えは出せそうにない。

Ｅｎｄ

第3話　好きの意味（後書き）

読んで頂いてありがとうございます。
これで恵里子先生と晶のお話はひとまず完結です。
続編もやってみようかな・・・なんて考えてます。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2739d/

Taste Sweet

2011年10月4日16時52分発行